

江戸後期から明治初期における銚子地域の寺子屋師匠

Terakoya School Teachers in Choshi Region
from the Late Edo Period to the Early Meiji Period戸塚 唯氏¹⁾・伊勢崎 翼²⁾Tadashi TOZUKA¹⁾ and Yoku ISEZAKI²⁾

江戸時代、銚子は政治・流通・交通の要衝であり、人口も多かった。そのため、多くの寺子屋が設立された。寺子屋とは6歳から12歳頃までの庶民の児童を対象とした当時の教育施設である。本研究の目的は、江戸時代中期から明治初期にかけて銚子地域に存在した寺子屋師匠の数と名前を明らかにすることであった。様々な文献や筆子塚の記載を調査した結果、最終的に107名の寺子屋師匠の存在を明らかにした。また、寺子屋師匠の没年情報を用いて年代別の寺子屋師匠数を算出したところ、銚子では19世紀中旬に多くの寺子屋師匠が存在していたことが明らかとなった。

1. 本研究の目的と銚子における寺子屋

1. 1 本研究の目的

江戸時代後期の銚子は政治、流通、海防に関する要衝であり、多くの人々が集まる都市であった。19世紀初頭にはすでに江戸の衛星都市として屈指の規模を誇っていたと思われる。当時の銚子地域全体に関する人口調査は存在していないが、この地域の中心であった飯沼村（現在の銚子観音を中心とした地域）については、文政年間（1818-1831）に7221人、天保年間（1831-1845）に7663人、明治5年（1872）に13710人という記録¹⁾が残っている。飯沼村以外の銚子地域も同様に人口が増加していったと思われる。また当時は貨幣経済が社会に浸透していった時期でもあった。庶民の間でも「読み書き・そろばん」の能力が必要とされるようになった。そのため次第に庶民に対する教育の重要性が認識されるよ

うになり、結果、多くの寺子屋が設立されるようになったものとみられる。後述するいくつかの史料に銚子で多くの寺子屋が設立されたことが記されている。また多くの筆子塚（弟子たちが寺子屋師匠を祀った記念碑）が市内に点在しており、これらも銚子に多くの寺子屋師匠が存在したことを示している。

しかしながら、銚子の寺子屋についてはまとまった研究が存在しない。銚子の寺子屋・寺子屋師匠の情報は、後述の文献に散在しているが、それらは未整理で人名の重複や齟齬も多く、どの時期にどのくらいの数の寺子屋師匠が存在したか全く明らかになっていないのである。また文献に記されている情報と筆子塚等に刻まれている金石文との照合も十分になされているとはいえない。隣接する旭市では一定の調査が行われ、その結果が整理されているのは対照的である²⁾。銚子の寺子屋の中には当時としては珍しく女子教育にも力を入れていた寺子屋も存在しており、この点からも銚子の寺子屋に関する研究は重要である。また筆子塚の多くは幕末に作られており、すでに150年以上が経過している。都市開発や風化によって失われてしまったものも多い。筆者らはいくつもの貴重な筆子塚が失われていることを確認している。今を逃せばさらに多くの筆子塚が失われ、銚子の寺子屋師匠の実像を知ることが困難になると思われる。

そこで本研究では、銚子に存在した寺子屋師匠につい

連絡先：戸塚唯氏 ttozuka@cis.ac.jp

1) 千葉科学大学 教職・学芸員センター
Center for Teacher Training and Museum Education, Chiba Institute of Science

2) 千葉科学大学学外連携ボランティア推進室
Collaboration outside the University & Volunteer Promotion Office, Chiba Institute of Science

(2018年9月28日受付, 2018年12月13日受理)

て検討したい。具体的には、銚子に存在した寺子屋師匠の名前、各年代の銚子の寺子屋師匠の数について明らかにする。個々の寺子屋師匠の経歴や各寺子屋で行われていた教育の実態を明らかにすることも重要であるが、紙面の制約もあり、それらについては後日別の機会に報告するものとした。

1. 2 江戸後期から明治初期にかけての銚子

17世紀半ばには、東廻り・西廻り航路の整備により、全国的ネットワークが完成し、沿岸海運と内陸水運を活用した物流経路が整備された。江戸の繁栄に伴って、近接する地方都市も次第に発展していった。中でも銚子は重要な商港として、仙台藩、磐城藩などの廻船で賑わい、東北各藩の年貢米の集積地となった。江戸屈指の衛星都市として発展した銚子には、全国各地から多くの人が集まったという。17世紀は「開発の17世紀」とも呼ばれるほど新田開発が盛んであったが、銚子地域もその例にもれず、漁業や流通の拠点としてのみならず、江戸を支える近郊農業地帯としても発展していった。そしてこのような発展に伴い、銚子の人々の間でも教育への関心が高まっていったと思われる。

当時の銚子は高崎藩の支配下にあり、現在の陣屋町公園付近に高崎藩の陣屋が置かれ、この地域の政治的中心となっていた。付近には陣屋詰めの高崎藩士が多数居住していたとみられる。銚子を代表する私塾であった守学塾は陣屋の付近に存在し、高崎藩士の子弟を教授していた。また銚子の代表的寺子屋である露竹堂も付近に存在した。

1. 3 寺子屋とは

当時の銚子地域の寺子屋がどういったものであったかイメージしやすくするため、以下に『千葉縣海上郡誌』に述べられている寺子屋の実態を紹介した文章を示す。古い表現が多く使われているので現代語訳している。

寺子屋はあちこちに設立され、庶民の子どもたちを集めて、一般的な普通教育を行った。教科についても日常生活に必要な読み・書き・計算などであった。とりわけ書方に力を入れ、やや進んで読方を教えた。計算を教えるところは少なかった。書方の手本としては伊呂波名頭、国尽、消息往来、商売往来、百姓往来、庭訓往来などを用いた。読方には実語教、童子教、今川古状揃、女今川、女大学、孝経等を用い、すこし進んでから四書五経等を用いた。算術についてはそろばんを用い、主に八算、見一、相場割等を教えた。教師は僧侶、浪人、神官、医師その他百姓町人の中で学問の知識ある者であった。またその学童を寺子

(あるいは筆子)といい、多くの場合六、七歳で就学し、長い者で一二、一三歳まで学んだ。しかし女子については就学する者が極めて少なく、多くの者は裁縫師匠のもとに通った。寺子屋では人別教授法がとられていた。一人二人ずつ代わる代わる教師のところについて教授してもらい、その他の者は自習であった。また毎月一日と一五日、および五節句、お盆、正月を休みとした。授業時間は概ね午前八時から午後三時で、夏季は午前六時から正午までであった。ただ、僻地の寺小屋ではこのようなはっきりとした時間の定めはなく、師匠の都合によって変更があったのはもちろんのことである。子どもたちは相互にとても親しかったがそれだけではなく、子どもたちは師匠をたいへん尊敬していた。それは現在(著者注:大正期)の学童が教師へ向ける尊敬と比べられないほど大きいものだった。尊敬していたのは子どもたちだけではなく、その家族も一緒になって「お師匠様」と言って敬って、子どもが成人したのちもずっと手紙を出したり訪問したりした。

(『千葉縣海上郡誌』³⁾を一部改変)

江戸中期から後期にかけて、貨幣経済が発達し、庶民も教育の重要性に気づくようになったと思われる。農民にしても年貢や収穫物に関する計算が必要であったはずであるし、商人や職人にしても商品の管理や販売において書字や計算の能力は必須であっただろう。このような、庶民の教育的要望の受け皿となったのが寺子屋であった。『千葉県教育百年史』⁴⁾によれば、房総での寺子屋・私塾の数は、天保期(1840年頃)にピークに達したとある。

ところで「寺子屋」という名称についてであるが、当時の房総ではあまり使用されていなかったと指摘されている。『千葉県百年史』⁵⁾には、「名称は稽古所、手習所などが普通で、関西のように寺子屋とはいわなかった」とあり、房総の筆子塚を調査した川崎⁶⁾も、房総の筆子塚設立主の名として「寺子」の文字が極端に少なかったことを挙げて、寺子屋の名称の使用にためらいを見せている。筆者も手習所等の方がより適切であろうと考えるが、現代においては当該の教育施設を表現するのに寺子屋という名称が一般的であるため本研究でもその名称を使用することとした。

なお幕末・明治初期に市井で教育活動を行っていた者のうちどの年代までの者を寺子屋師匠と見做すか、またどのような基準で私塾と寺子屋の区別をするかは難しい問題であるが、本研究では基本的に明治5年(1872年)の学制頒布よりも前に初等教育に従事していたと推測される者を寺子屋師匠とし、同時期に高等教育(漢学、国

学、儒学等)に従事していた証拠のある者を私塾教師とした。

1. 4 銚子の寺子屋に関する文献史料

現代においては、銚子の寺子屋・寺子屋師匠に関する多くの一次史料は失われてしまっているが、明治初期～昭和期に一次史料を編集加工した二次史料がいくつか存在している。その主なものを表1に示した。以下、これらについて概説する。

『日本教育史資料』は当時の文部省が編纂を企画したもので、明治16年(1883年)から府県庁および諸学校に保存されている学制以前の教育記録を収集したものである。さらに旧藩関係の史料や報告も含まれており、当時の日本の教育の実態を知るうえで貴重な史料となっている(1890年から順次発行)。その巻八に千葉県内の私塾・寺子屋一覧表があり、その中に銚子の守学塾と露竹堂の記述がある⁷⁾。同表に掲載されていた銚子の私塾・寺子屋はこの2つのみである。

『千葉県海上郡誌』⁸⁾は大正6年(1917年)に刊行された地域歴史書で、海上郡の教育に関する記述が含まれている。海上郡とは明治11年(1878年)に誕生した行政区画であり、概ね現在の銚子市と旭市を合わせた区域である。同書には銚子の私塾である守学塾、懐徳塾の記述がある。また海上郡の寺子屋師匠の一覧も掲載されており⁹⁾、計81名が挙げられている。そこから現在の銚子市内(当時の高神村、本銚子町、銚子町、豊浦村、海上村、舟木村、椎柴村、豊岡村の一部)の地域の寺子屋師匠を数えると計26名であった^(註1)。

『千葉県教育史』¹⁰⁾は昭和11年(1936年)から発行された千葉県の教育の歴史を記した史料である。同書には「銚子市、海上郡の私塾及び寺子屋教育」の節があり(第8章第6節)、銚子の守学塾、懐徳堂、露竹堂について詳述されている。また同書巻一には寺子屋一覧表が掲載されており¹¹⁾、銚子市と海上郡の寺子屋師匠が計94名挙げられている。この94名には前述の『千葉県海上郡誌』の81名がすべて含まれていることから、『千葉県教育史』の寺子屋一覧表は『千葉県海上郡誌』のそれに加筆して作成されたものと思われる。ただし銚子地域の寺子屋師匠名についての加筆はない。

『銚子市史』¹²⁾は昭和31年(1956年)に発行された銚子市の歴史書である。同書には「江戸末期の庶民教育」の節が存在していて(第4章第10節)、石毛岩三郎の長者学舎(垣根学舎)の史料や守学塾、懐徳塾の記述がある。また『千葉県海上郡誌』から抜粋する形で銚子地方の寺子屋師匠一覧表を掲載しており、豊岡村八木および豊岡村親田の4人を除く22名が掲載されている^(註2)。またこの一覧表以外にも多くの寺子屋師匠がいたことを指摘し、筆子塚や頌徳碑に基づいて幕末における14名の銚

子市内の寺子屋師匠の名を別頁に挙げている¹³⁾(うち3名は先の一覧表と重複している)。なお『銚子市史』は「上述するところの他にも・(中略)・まだたくさん寺子屋があり、多くの師匠がいたと思われる」と述べており、市史に記された寺子屋師匠は実際に存在した者の一部に過ぎないだろうことを示唆している。

『千葉県教育百年史』¹⁴⁾は昭和48年(1973年)から発行された千葉県の教育の歴史に関する史料である。同書の「房総における寺子屋私塾の成立状況(地域別)」の表には、享保元年(1716年)から明治5年(1872年)の間に、海上郡には私塾2、寺子屋82、算学塾5があったと記されており¹⁵⁾、さらに別表で、銚子(町方)における寺子屋と私塾を計9と示している¹⁶⁾。

このように銚子の寺子屋についてはいくつかの記録があるが、当然のことながらどれも完璧な史料ではない。例えば『日本教育史資料』は明治維新の混乱期に収集された史料であり、すべての教育機関について収録できているわけではないし、『千葉県海上郡誌』や『千葉県教育史』、『銚子市史』に掲載されている私塾・寺子屋の数についても部分的に齟齬がみられる。実際はこれらの史料に記されているよりもずっと多くの私塾・寺子屋があったと考えられる。関山¹⁷⁾は千葉県教育史に関する重要な史料として『日本教育史資料』、『千葉県教育史』、『千葉県教育百年史』を挙げ、『日本教育史資料』の欠陥を「補充ないし補正する試み」が『千葉県教育史』でなされ、さらにそれを「補充ないし補正する試み」が『千葉県教育百年史』でなされた」と指摘している。ただし後発の文献が先行する文献よりも必ずしも正確であるわけではないとも指摘し、これらの文献に関して有用性と限界を念頭においた慎重な取り扱いが必要と述べている。本研究においても後発の史料を無条件に採用するのではなく、次にあげる非文献史料と対照しながらできるだけ正確な情報を明らかにしていきたい。

表1 近銚子の教育に関する主要文献

文献名	成立年
日本教育史資料	明治23～25年(1890～1892年)
千葉県海上郡誌	大正6年(1917年)
千葉県教育史	昭和11～16年(1936～1941年)
銚子市史	昭和31年(1956年)
千葉県教育百年史	昭和48～50年(1973～1975年)

1. 5 非文献史料

文献以外の史料として、筆子塚や頌徳碑等の存在が挙げられる。筆子塚とは寺子屋師匠の没後、その弟子(筆子あるいは筆弟と称することが多かった)が報恩の気持ちから建立したものであり、塚には「筆子中」、「筆弟中」などの文字が刻まれていることが多い。頌徳碑とは

先人の徳を称える記念碑である。千葉県の筆子塚・頌徳碑に関する先駆的研究に川崎の『筆子塚研究』¹⁸⁾がある。川崎は千葉県内を実際に回って筆子塚や教育に関する頌徳碑を発見・整理し、それまで文献研究で明らかになってきたよりもはるかに多い3084人の寺子屋師匠の存在を明らかにした。都市開発や寺社の統廃合、石碑の風化等で失われてしまった寺子塚・頌徳碑も数多いことから、川崎は房総に15000人以上の寺子屋師匠が存在していたと推測している。また同書を補完する形で『筆子塚資料集成』¹⁹⁾が編まれており、そこには現在の銚子市内の地域に84の筆子塚・頌徳碑があることが示されている(注3)。

2. 銚子の寺子屋に関する調査

2.1 銚子の寺子屋師匠の名前

銚子にも数多くの筆子塚・頌徳碑が存在しているが、どのくらいの数の寺子屋師匠が存在したのだろうか。以下、記録に残っている寺子屋師匠に限られるが、現在の銚子市内に存在した寺子屋師匠の数を明らかにすることを試みた。

まず、1.4節で記した『日本教育史資料』・『千葉県海上郡誌』・『千葉県教育史』・『銚子市史』・『千葉県教育百年史』、および1.5節で示した『筆子塚研究』・『筆子塚資料集成』から銚子の寺子屋師匠の情報を抜き出した。さらに銚子の石碑に関する文献²⁰⁾²¹⁾や銚子の小学校沿革史²²⁾²³⁾からも銚子の寺子屋師匠に関する情報を抜粋した。

これらから抜き出した寺子屋師匠の名前には重複があり、単純に合計することはできない。そこで寺子屋師匠の名前を照らし合わせながら重複を除いて集計していった(注4)。当時の寺子屋師匠の名は、諱、通称、号、戒名など、様々な様式で記されており、同一人物の可能性があっても特定に至らないことがあったが、そのようなものについては別人として集計した。このような作業の結果、最終的に107名(注5)の寺子屋師匠の存在を明らかにすることができた(表2を参照)。しかしながらどの史料にも記載されなかった寺子屋師匠も当然存在した

はずであり、そのためこの107という数字は目安に過ぎないことを理解すべきである。川崎は『筆子塚研究』で3084の房総の寺子屋師匠の存在を明らかにした上で、すでに失われてしまった史料等を考慮して、実際にはその5倍程度の数の寺子屋師匠がいたと推測しているが、同様に考えると、銚子には累計数百人の寺子屋師匠が存在した可能性がある。また上記の107名のうち少なくとも4名は女性であり、女性も教育活動を行っていたことが明らかとなった。

2.2 年代別寺子屋師匠数

上述のように、銚子には少なくとも107名の寺子屋師匠が存在した。そのうち明確に没年が特定できる市内最古の筆子塚は銚子市親田町の真福寺にあり、その没年は宝暦4年(1754年)2月である。また最新のものは晩翠石毛先生碑であり、没年は大正3年(1914年)12月である。最古のものとの最新のものの間の期間は約160年である。そこで次にこれら107名の寺子屋師匠に関して、各年代にどの程度の数が存在したかを明らかにしようとした。

没年あるいは筆子塚建立年が分かっている師匠のみを抽出し、10年ごとに人数を集計した(図1)。没年だけでなく筆子塚建立年の情報を使用したのは、筆子塚には師匠の没年の代わりに筆子塚建立年が記されていることがあるためである。筆子塚は必ずしも師匠没後すぐに建てられているわけではないが、多くは没後数年以内に建てられているため、結果を大きく変えることはないだろうと考えた。ただし結果の解釈においては、すでに失われてしまった筆子塚が存在するだろうことや、そもそも筆子塚が建立されなかった寺子屋師匠も相当数存在しただろうことも考慮しなければならない。

集計の結果、銚子の筆子塚・頌徳碑は文政年間(1820年代)から増加し、万延～明治初期(1860年代～1870年代)にピークを迎え、その後減少していったことが見て取れる。『筆子塚研究』²⁴⁾には、房総全体の寺子屋師匠没年状況の図が掲載されており、1800年頃から急激に増加し始め、1860～1870年代にピークに達し、その後

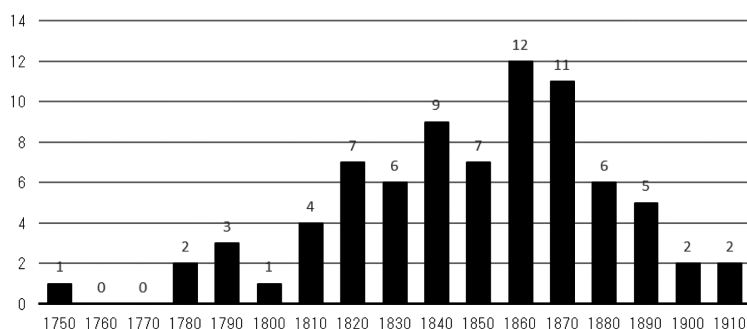


図1 筆子塚・頌徳碑の数(10年ごと)

減少したことが示されている。銚子の寺子屋師匠没年の分布は房総全体の傾向とほぼ同じであるといえるだろう。『筆子塚研究』の手法に倣って各寺子屋師匠が活躍した時期を没年前の30年間と仮定すると、銚子では1790年代から1870年代頃にかけて多くの寺子屋師匠が活躍していたと言える。なお、図1では18世紀後半

の筆子塚の数は19世紀後半の15%程度にすぎず、18世紀後半の寺子屋教育が19世紀後半のそれに比べてだいぶ貧弱であったように見えるが、古い筆子塚ほど風化等による喪失が多いだろうことを考慮する必要がある。なお参考までに銚子の代表的な筆子塚を図2～図7に示した。



図2 法印権大僧都祐慶の筆子塚（親田町真福寺）
* 筆子塚研究には台石の情報があったが、本研究調査時には発見できなかった。



図3 普寂軒義山先生の筆子塚（春日町浄国寺）
* 台石に筆弟とある



図4 傳燈大阿闍梨法印能恵の筆子塚（宮原町蓮蔵院）
* 台石に筆弟とある



図5 贈大阿闍梨法印峯入智道の筆子塚（名洗町 正明院不動堂）
* 台石に筆弟中とある



図6 石毛胖庵の頌徳碑（胖庵翁碑；芦崎町円養院）



図7 伊勢崎治郎左衛門の筆子塚（馬場町圓福寺）
* 台石に筆弟中とある

表2 銚子市内における寺子屋師匠名一覧（その1）

No	師匠没年月日	師匠名	備考
1	1754年（宝暦4年）2月13日	法印権大僧都祐慶	筆集
2	1782年（天明2年）1月10日	権少僧都等惠	筆集 3、5と同墓
3	1786年（天明6年）1月3日	法印権大僧都秀惠	筆集 2、5と同墓
4	1792年（寛政4年）12月14日	松本長門守藤原勝興	筆集 33の祖父 神官
5	1794年（寛政6年）10月25日	贈法印権大僧都尊惠	筆集 2、3と同墓
6	1797年（寛政9年）6月18日	小松屋伊兵衛	筆集
7	1809年（文化6年）3月15日	五十嵐口水	筆集
8	1810年（文化7年）11月24日	法印権大僧都隨峯	筆集
9	1814年（文化11年）3月1日	権大僧都法印英亮（慈雲山廿一世）	筆集
10	1814年（文化11年）5月18日	権大僧都法印秀惠（仮名知海）	筆集 12、29と同墓 奥州白河の生まれ（筆子塚研究）
11	1815年（文化12年）3月（建立年）	普寂軒義山	筆集、銚史 11、29と同墓
12	1820年（文政3年）12月17日	権大僧都俊惠	筆集 10、29と同墓 讚州高松の生まれ（筆子塚研究）
13	1823年（文政6年）12月13日	忍嶺學士	筆集、銚史
14	1824年（文政7年）12月24日	権大僧都法印自覺	筆集
15	1826年（文政9年）5月27日	大阿闍梨法印融範	筆集 23（明星院）と同墓
16	1827年（文政10年）2月16日	多部田維恭（戒名：教輝智詮居士）	筆集、銚史
17	1827年（文政10年）8月17日	龍淵先生（戒名：法性院清月道光居士）	筆集、銚史 八日市場長福寺にも「竜淵先生銚子筆弟中」とある筆子塚（筆研）
18	1828年（文政11年）5月21日	権庵魚遊（戒名：哲了院覺翁春意居士）	筆集
19	1830年（天保元年）10月12日	千葉力衛頼胤（千葉與右衛門）	筆集、海誌 船木町中島 65の父（千葉左金吾翁之碑）
20	1831年（天保2年）1月4日	發譽但心法子	筆集
21	1837年（天保8年）4月25日	俗名伊祐（戒名：淨教禪定門）	筆集
22	1838年（天保9年）3月15日	中菴先生（戒名：鶴阿杏林居士）	筆集、銚史
23	1838年（天保9年）4月25日	大阿闍梨法印長高（法印大僧都長高）	筆集 筆子塚は光明院と明星院にあり、後のものは15と同墓
24	1839年（天保10年）5月17日	福岡金三郎雄惠	筆集 佐原市水神社に別に筆子塚がある
25	1841年（天保12年）4月	大阿闍梨寛惠（当山三十三世）	筆集

表2 銚子市内における寺子屋師匠名一覧（その2）

No	師匠没年月日	師匠名	備考
26	1842年（天保13年）6月15日	玉山前田先生（諱温卿・字恭安・号玉山）	筆集 医者か（筆子塚研究）
27	1842年（天保13年）6月27日	大阿闍梨堅者次印明観	筆集
28	1843年（天保14年）5月17日	宮内嘉長	筆集、銚史 78の義父
29	1843年（天保14年）8月（建立年）	大阿闍梨次印恭恵	筆集 10、12と同墓
30	1844年（天保15年）6月（建立年）	（賢徳寺住職）（墓碑銘の記載なし）	筆集
31	1846年（弘化3年）9月17日	小笠原兵衛（名ト山・小字源三郎）	筆集 高遠藩（現在の長野県伊那市）出身（筆子塚研究）
32	1846年（弘化3年）10月（建立年）	傳燈大阿闍梨法印能恵	筆集
33	1847年（弘化4年）10月2日	松本勝信（諱勝信・氏松本・号魚取）	筆集 4の孫、63の父 海上八幡宮神官（筆子塚研究）
34	1853年（嘉永6年）12月（建立年）	林勝右衛門	筆集
35	1854年（嘉永7年）5月23日	巖瀬三右衛門（諱三柳・号流下亭）	筆集 船木村の人（筆子塚研究）
36	1854年（安政元年）10月8日	伊勢崎治郎左衛門（諱貞利・号東洲）	筆集 76の父 弟子数百人（筆子塚研究）
37	1854年（嘉永7年）12月18日	権大僧都次印純恵（今泉邑持明院隠居）	筆集
38	1855年（安政2年）3月13日	謙山併邦女	筆集 女性
39	1855年（安政2年）12月10日	藤重（戒名：赫観居士）	筆集
40	1857年（安政4年）閏5月2日	贈大阿闍梨法印峯入智道	筆集
41	1864年（文久4年）3月14日	宮内与左工門力（戒名：鳴學厚德居士）	筆集 51と同墓
42	1864年（元治1年）11月12日	信田将謙	信田氏十六世鉄洲先生之墓誌（銚子市史436頁）より
43	1865年（元治2年）2月28日	向後義忠（諱義忠・称九平・号把雲子）	筆集 107の甥 小浜村の人、馬医、享年68（把雲子向後翁墓碣）
44	1866年（慶応2年）7月30日	岩瀬文藏	筆集
45	1868年（慶応4年）3月（建立年）	名雪昌直（号祐庵）	筆集 僧侶、教えを受けた郷人200人（筆子塚研究）
46	1868年（慶応4年）9月28日	星野五右工門	筆集 72と同墓
47	1868年（明治元年）11月8日	権大僧都法印長譽（良福寺四十二世）	筆集
48	1869年（明治2年）2月5日	岩瀬平左衛門（通称支甫・号一草菴）	筆集 海上郡忍村の人（筆子塚研究）
49	1869年（明治2年）3月9日	滑川清造	筆集 64と同墓 高神村で幼童を数年教授、享年46（筆子塚研究）
50	1869年（明治2年）3月18日	（野邑氏）（戒名：浮泉道看信士）	筆集

表2 銚子市内における寺子屋師匠名一覧（その3）

No	師匠没年月日	師匠名	備考
51	1869年（明治2年）8月3日	（宮内氏）（戒名：至誠文誦居士）	筆集 41と同墓
52	1869年（明治2年）12月18日	滑川雷孫光家	筆集
53	1870年（明治3年）3月12日	龜嵐藏六（字藏六・通称亀嶋含萬平）	筆集 書道家か 没年66歳（龜嵐藏六翁記）
54	1872年（明治5年）8月23日	（川又姓）（戒名：真悟宗賢信士）	筆集 烏山の生まれ（筆子塚研究）
55	1873年（明治6年）10月3日	青木融山	筆集
56	1873年（明治6年）（建立年）	細田隆盈（本姓石神氏）	筆集 村中の100人の子弟を教授、1873年に69歳（細田隆盈翁壽藏碑）
57	1874年（明治7年）12月（建立年）	大網習之（通称三門・号移風）	森戸村の大網氏養子、1874年に62歳、109に学ぶ（移風大網君壽藏碑）
58	1875年（明治8年）6月乃至7月	梅津松濤	海誌 本銚子町竹町 没年情報はいいぬま創立120周年記念誌から
59	1876年（明治9年）7月8日	旭義隣（東海旭五百枝）	筆集、銚史 船木臺村の人、108に学ぶ（東海翁碑）
60	1877年（明治10年）9月2日	宮内傳十郎（諱定樹）	筆集、海誌、銚史 岡野臺村の人、村長（宮内傳十郎君墓碣）
61	1877年（明治10年）9月7日	石毛胖庵（諱毅・字無用）	筆集、銚史、海誌 銚子町荒野 62、96の父
62	1879年（明治11年）9月3日	石毛喜助	海誌 銚子町荒野 61の子
63	1879年（明治12年）4月23日	松本胤之（称直記・長門守）	筆集、銚史 33の子、79の父
64	1879年（明治12年）7月26日	滑川清造妻	筆集 49と同墓 女性
65	1879年（明治12年）8月（建立年）	千葉左金吾（名宣智）	筆集、銚史 19の子 中嶋村村長、200人を教授（千葉左金吾翁之碑）
66	1882年（明治15年）5月（建立年）	宮内忠藏（権左衛門三男）	筆集
67	1882年（明治15年）9月	岩井與五兵衛	筆集 村の子弟を教育す（恩師岩井翁碑）
68	1882年（明治15年）11月9日	清水義八	筆集、銚史、海誌 豊浦町 幕府の能役者（銚子市史）
69	1885年（明治18年）1月22日	信田源口（戒名：光照清信士）	筆集
70	1886年（明治19年）11月（建立年）	木内直胤（通称三郎左衛門）	筆集 芦崎村の人 代々里正（名主） 1886年に74歳（木内直胤之碑）
71	1889年（明治22年）6月（建立年）	阿闍梨法印明恵（神原氏）	筆集 飯岡邑の生まれ（筆子塚研究）
72	1890年（明治23年）旧12月13日	星野五右工門妻（戒名：観賢妙教信女）	筆集 46と同墓 女性
73	1893年（明治26年）8月（建立年）	法印権大僧都謙恵（安藤氏）	筆集 福嶋縣警城國田村郡滝根村の生まれ、歡喜院住職（筆子塚研究）
74	1894年（明治27年）12月12日	齋藤五郎吉	筆集 設立者『筆子46人「女子13人」』（筆子塚研究）
75	1894年（明治27年）12月（建立年）	（戒名：法皇院醫教玄仙居士）	筆集

表2 銚子市内における寺子屋師匠名一覧（その4）

No	師匠没年月日	師匠名	備考
76	1895年（明治28年）3月4日	伊勢崎治郎治	海誌 本銚子町西町 36の子 子の貞幹も師匠と見做すべきかも
77	1895年（明治28年）旧6月15日	浜野元貞	筆集
78	1900年（明治33年）12月1日	宮内君浦	筆集 私塾塾主 28の義子
79	1902年（明治35年）7月13日	松本胤雄（諱胤雄・称直樹・号臨波）	筆集 私塾塾主 63の子
80	1906年（明治39年）8月（建立年）	植松金兵衛	海誌 200人以上の入門者、1906年に60歳（松琴居士寿蔵碑）
81	1909年（明治42年）旧12月26日	青柳正廣（通称儀右衛門）	筆集 行年88才
82	1911年（明治44年）8月18日	西村寛司（称光惠改寛司）	筆集、銚史
83	1914年（大正3年）12月19日	石毛直樹（通称嘉門・号晚翠）	船木村芦崎の人 本村小・椎柴村長山分校で教授（晚翠石毛先生碑）
84	不明 康午1月21日	茂木治兵衛源朝義	筆集 没年は康午とあり、1690、1750、1810、1870年のいずれか
85	不明	百瀬耕啓	筆集、銚史 「文化年中？（磨滅）」
86	不明	豊田久左工門	筆集 妻の没年は1814年（文化11年）（筆子塚研究）
87	不明	道譽禪門	筆集
88	不明 1694年（元禄7年）7月か	秀忍比丘尼	筆集 女性
89	不明	土山禎作	海誌 高神村
90	不明	青柳省三	海誌 青柳東一郎（高神小校長）の父、元高崎藩士（青柳氏頌徳碑）
91	不明	海静庵	海誌 本銚子町清水町
92	不明	欣求庵	海誌 本銚子町後飯町
93	不明	吉川空左衛門	海誌 本銚子町通町
94	不明	山本清衛門	海誌 本銚子町馬場町
95	不明	久間瀬松治郎	海誌 本銚子町西仲町
96	不明	石毛岩三郎	海誌 銚子町荒野、海上村 61の子 昭和3年時点で存命（石毛家墓碑）
97	不明	木村三郎左衛門	海誌 船木村芦崎 70と同一人物か
98	不明	星野善光	海誌 船木村等覺寺
99	不明	岡野法印	海誌 椎柴村野尻上宿
100	不明	花井與一	海誌 椎柴村野尻田中

表2 銚子市内における寺子屋師匠名一覧（その5）

No	師匠没年月日	師匠名	備考
101	不明	島田雲庵	海誌 椎柴村小舟木
102	不明	□□ 高之允	海誌 椎柴村忍前柴
103	不明	向後新左衛門	海誌 豊岡村八木
104	不明	常世田惣衛門	海誌 豊岡村八木
105	不明	常世田多輔	海誌 豊岡村八木
106	不明	加瀬逸之助	海誌 豊岡村親田
107	不明	吉兵衛	43の叔父（把雲子向後翁墓碣銘）
108	不明	萩谷榮祥	猿田村、59の師（東海翁碑）
109	不明	邱斎先生	森戸邑、57の師（移風大綱君壽藏碑）

注1：参考のためこの表には本稿で私塾教師として扱っている2名（78、79）を加えている。他にも私塾教師として扱うべきかもしれない者がいるが、私塾水準の教育を行っていた明確な証拠がなかったため寺子屋師匠として記した。

注2：『筆子塚資料集成』、『千葉縣海上郡誌』、『銚子市史』、『筆子塚研究』、金石文等を参考に作成。師匠名が不明の場合には戒名、墓碑銘等を記した。できるだけ出典に忠実に記したが、筆者の使用環境にない旧漢字については新漢字で代用した。なお備考欄の「筆集」、「海誌」、「銚子市史」は、それぞれ『筆子塚資料集成（179-231頁）』、『千葉縣海上郡誌（588-593頁）』、『銚子市史（433頁）』に当の人物名が記載されていることを示す。備考欄のその他の情報は、ほとんど『千葉縣海上郡誌』と『筆子塚研究』掲載の碑文から抜粋した。それら以外から抜粋した情報については出典を示した。また70の木内直胤（通称三郎左衛門）は、名称の類似から海誌の「木村三郎左衛門 声崎」と同一人物と推定している。

3. まとめ

本稿では、銚子にどの程度の数の寺子屋師匠が存在したのかを明らかにするために、文献や金石文に残されていた寺子屋師匠名を整理し、すくなくとも107名の寺子屋師匠がいたことを明らかにした。これは記録に残っている者のみの数であるから、実際にはその数倍の数の師匠が存在したと考えられる。また、年代別の各寺子屋師匠の数を調査したところ、そのピークは1860年代であり、銚子ではおおむね1790年代から1870年代頃にかけて多くの寺子屋師匠が活躍していたことが明らかとなった。

本研究によって銚子の寺子屋師匠についていくつかの知見を得ることができたが、今後取り組んでいかなければならない課題が残されているのでここに挙げておきたい。まず、2018年現在における市内の筆子塚の確認・記録が完全にはできておらず、悉皆調査が必要である。前述の『筆子塚資料集成』には銚子の多くの筆子塚・頌徳碑が記録されているが、そこに記録されている情報は、文字情報（碑文）のみであり、筆子塚・頌徳碑の形状、大きさについては記録されていない。本研究でも多くの筆子塚の調査を行ったが、時間的制約と労力の大きさから全てを調査することができなかつた。しかし、寺子屋廃絶の契機となった学制頒布から数えてもすでに145年が経過しており、多くの筆子塚に風化、破損の傾向がみられる。今後、そう遠くないうちに多くの筆子塚が失われてしまうだろう。実物が残っているうちにこの地域の筆子塚の形状について記録、考察すべきである。

また銚子のほとんどの寺子屋師匠は、名前とわずかな経歴程度しか情報が残っていないが、伊勢崎治郎治、石毛胖庵については寺子屋で使用したテキスト・寺子屋の日課・寺子屋師匠の性格特徴・筆跡等についての情報が残っている。これらを検討して当時の銚子の寺子屋の実態について全体的に明らかにしていくことも必要である。特に伊勢崎治郎治の寺子屋（露竹堂）は、当時としては女子の筆子の比率が高かったが、そこで使われていたテキストを詳しく検討することによって、当時の寺子屋の女子教育の方針や教育水準が明らかになるとと思われる。

注

注1 同書は、海上郡豊岡村の寺子屋師匠として八木地区の向後新左衛門・常世田惣右衛門・常世田多輔、親田地区の加瀬逸之助、塙地区の菅生嘉左衛門・菅生安兵衛の名前を挙げている。このうち親田地区は明確に現在の銚子市に含まれているが、八木と塙については地区の境界が当時と現在で異なっており、またそれぞれが現在の銚子市と旭市に分割されて属している。そして上述の八木3名と塙の1名が各地域のどこで寺子屋を営んでいた

のか不明である。筆者らは現在の銚子市に存在した寺子屋師匠数を明らかにする上でこの4師匠をどう扱うべきか悩んだが、八木地区の多くが銚子市に、塙地区の多くが旭市に編入されていることから、塙の1名を除き、八木の3名を銚子市内に存在した師匠として扱うことにした。また同書は、海上郡鶴巻村倉橋の寺子屋師匠として石毛忠兵衛の名前が挙げているが、倉橋地区も現在の銚子市と旭市に分割されており、その多くが旭市に編入されていることから彼についても銚子の寺子屋師匠として扱わないこととした。

注2 豊岡村の銚子市への編入は昭和31年（1956年）4月（最終的な境界問題解決はこの翌年）であり、『銚子市史』が刊行される2ヶ月前である。編入が決まった時期には市史の編纂は概ね終わっていただろう。同書に豊岡村4師匠の名がないのはそのためと思われる。

注3 『筆子塚資料集成』はかつての郡別に編まれている。現在の銚子市のほとんどの地域はかつての海上郡に含まれていたが、豊里台地域は香取郡に含まれていたことから、両郡の史料を調べた。その結果、銚子市内の筆子塚は、かつての海上郡地域に80、香取郡地域に4つ存在した。なお『香取郡誌』²⁵⁾にもあたったが、そこに銚子地域の寺子屋師匠名は記載されていなかった。

注4 集計についての備考：銚子市史の14名はすべて『筆子塚資料集成』にある人名と重複していた。『銚子市史』にある西村寛治は誤りで、西村寛司と同一人物と判断。碑の建立年が異なっているが、『銚子市史』にある松本直記（称）（明治12年1月建碑とある）は、『筆子塚資料集成』の松本胤之（諱）（明治17年1月建立とある）と同一人物と推定（石碑に刻まれている文字から没年は後者が正しい）。没年の情報が異なっているが、『銚子市史』の旭東海（明治5年7月8日没とある）は『筆子塚資料集成』の東海旭五百枝（明治9年7月8日没とある）と同一人物と推定（石碑に刻まれている文字から没年は後者が正しい）。また『筆子塚資料集成』では大阿闍梨法印長高（法印権大僧都長高）の碑が2つ、石毛胖庵の碑が3つ紹介されているが、各1人として集計。また宮内伝十郎と宮内傳十郎などの新旧の字の違いがある場合も同一人物として集計。

注5 ただし表2には私塾教師の宮内君浦（no.78）および松本胤雄（no.79）を含めているので計109名となっている。両名は私塾教師として国学や関学などの高度な内容を教授していたが、前者については学制頒布前まで、後者については維新前まで寺子屋水準の初等教育も併せて行っていたため、参考までに掲載した。

引用文献

- 1) 宮内君浦：『千葉縣銚子港沿革誌』。銚子市，7，1892。
(千葉県立図書館蔵)
- 2) 海上町教育委員会：『海上町の寺子屋私塾』。千葉県立図書館製本，海上町，1973。
- 3) 千葉縣海上郡教育会：『千葉縣海上郡誌』。銚子町，586-587，1917。
- 4) 千葉県教育委員会：『千葉県教育百年史』第一卷通史編明治。千葉県教育百年史編さん委員会（編），7，1978。
- 5) 千葉県教育委員会：『千葉県教育百年史』第一卷通史編明治。千葉県教育百年史編さん委員会（編），79，1978。
- 6) 川崎喜久男：『筆子塚研究』。多賀出版，東京，4，1992。
- 7) 文部省：『日本教育史資料』巻八。臨川書店，378-388，1969。
- 8) 千葉縣海上郡教育会：『千葉縣海上郡誌』。銚子町，587，1917。
- 9) 千葉縣海上郡教育会：『千葉縣海上郡誌』。銚子町，588-593，1917。
- 10) 千葉縣教育会：『千葉県教育史』。千葉，1936-1941（1-5巻を順次刊行）。
- 11) 千葉縣教育会：『千葉県教育史』巻一。千葉，687-696，1936。
- 12) 篠崎四郎（編）：『銚子市史』。東京，1956。
- 13) 篠崎四郎（編）：『銚子市史』。東京，432-433，1956。
- 14) 千葉県教育委員会：『千葉県教育百年史』。千葉県教育百年史編さん委員会（編），1973-1975（1-5巻を順次刊行）。
- 15) 千葉県教育委員会：『千葉県教育百年史』第一卷通史編明治。千葉県教育百年史編さん委員会（編），45-46，1978。
- 16) 千葉県教育委員会：『千葉県教育百年史』第一卷通史編明治。千葉県教育百年史編さん委員会（編），48，1978。
- 17) 関山邦宏：“『日本教育史資料』掲載の私塾・寺子屋表をめぐる若干の覚書き—『千葉県教育史 巻一』掲載のそれとの比較を通して—”，『日本教育史資料』の研究VIII，日本教育史資料研究会。53-66，1989。
- 18) 川崎喜久男：『筆子塚研究』。多賀出版，東京，1992。
- 19) 国立歴史民俗博物館（編）：『筆子塚資料集成-千葉県・群馬県・神奈川県-』。佐倉，2001。
- 20) 関根昌吾：『銚子の碑』。1996。（銚子市公正図書館蔵）
- 21) 関根昌吾：『銚子の碑』第二集。1997。（銚子市公正図書館蔵）
- 22) 銚子市立興野小学校（編）：『興野学校沿革誌』。1972。
(銚子市公正図書館蔵)
- 23) いいぬま創立一二〇周年分離独立五〇周年記念事業実行委員会（編）：『いいぬま創立一二〇周年分離独立五〇周年記念誌』。1993。（銚子市公正図書館蔵）
- 24) 川崎喜久男：『筆子塚研究』。多賀出版，東京，734，1992。
- 25) 山田愨：『香取郡誌』。橘村（千葉県），1900。

Terakoya School Teachers in Choshi Region from the Late Edo Period to the Early Meiji Period

Tadashi TOZUKA¹⁾ and Yoku ISEZAKI²⁾

1) Center for Teacher Training and Museum Education, Chiba Institute of Science

2) Collaboration outside the University & Volunteer Promotion Office, Chiba Institute of Science

Choshi region on the late Edo period was center of politics, circulation, and traffic. Choshi was very populated city, and many Terakoya schools were established. Terakoya school was educational facility for children from six to twelve years old. The purpose of this study was to explore the headcount of Terakoya school teachers in Choshi region from the late Edo period to the early Meiji period. Investigation for historical sources and Fudekozuka monuments indicated that at least one hundred and seven teachers were existed in Choshi region. And numerating decennial headcount of Terakoya teachers showed many Terakoya teachers had existed around mid-19th century in Choshi region.